

# 日本人民反戦同盟資料 全12巻・別巻1

## ●復刻版概要

●編者——鹿地巨資料調査刊行会

●概要——A4判・角背上製本・全12巻・別巻1  
総頁4,900頁

●別巻——全収録資料の総目次、関連年表、  
解題・解説（別売可）

## ●各巻の主要内容と配本予定

第1巻Ⅱ『人民の友』『真理の闘ひ』	●配本——全5回配本（'94年5月～'95年12月） ●価格——本体価格・各巻 215,000円 全12巻・別巻1 4,515,000円	●解題・解説——井上 学 ●原本提供——瀬口 允子
第2巻Ⅱ『真理の闘ひ』『呼声』『新日本』『東亜先鋒』	●配本——1回配本 '94年5月 ●価格——本体価格105,000円	
第3巻Ⅱ『国民の総意』『日本人に告ぐ』『在華日本人民反戦同盟準備会組織図』他	●配本——2回配本 '94年9月 ●価格——本体価格105,000円	
第4巻Ⅱ『本会総部同盟員八名の逃亡とその前後の経過に関する報告』 「山田 浩訊問の経過」他	●配本——2回配本 '94年9月 ●価格——本体価格105,000円	
第5巻Ⅱ『鹿地研究室報告』（日本文原稿及び中文）他	●配本——2回配本 '94年12月 ●価格——本体価格105,000円	
第6巻Ⅱ『鹿地巨原稿類』及び「鹿地研究室俘虜調査」、「対敵宣伝品貼本」他	●配本——2回配本 '94年12月 ●価格——本体価格105,000円	
第7巻Ⅱ『日本民族解放同盟綱領草案』『民主日本建設同盟設立に関する要綱』 「同盟員作成資料」他	●配本——4回配本 '95年5月 ●価格——本体価格105,000円	
第8巻Ⅱ『日本暴行調査』（経済的略奪、謀計、放火、破壊、虐殺、対婦女暴行）等	●配本——5回配本 '95年12月 ●価格——本体価格35,000円	
第9巻Ⅱ『延安の文献』『新四軍書簡』『青山和夫に関する文献』 「朝鮮、台湾、反侵略同盟に関する文献」		
第10巻Ⅱ『毛辺紙の記録』（二九四五末）、「中国側公文書及公用電報」 「政府要人來信類」、ヒラ等		
第11巻Ⅱ『同盟員の手紙』（合計47名、約315通）		
第12巻Ⅱ『鹿地・池田書簡』		
別 巻Ⅱ『全収録資料の総目次、関連年表、解題・解説』		

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。

## 不二出版

東京都文京区向丘一丁目二  
TEL 03-3812-4433  
FAX 03-3812-4464  
振替 〆東京 六一九四〇八四

# 日本人民反戦同盟資料 全12巻 別巻1

## 鹿地巨資料調査刊行会編



米軍将校の訪問を受けた鹿地巨と同盟の中心メンバー。1944-5年頃、重慶にて。左から通訳、将校、鹿地巨、山川要、池田幸子、将校。（写真提供＝瀬口允子）

### ●復刻の経過

故鹿地 巨（かじ わたる 一九〇三—一九八二）の生涯は、すでにひろく知られております。氏は、日本プロレタリア作家同盟の最後の書記長として、戦前の組織的プロレタリア文学運動の最期に立ち会ったこと、日中全面戦争開始時に敢えて中国側に投じ、以後戦争の全期間を通じて、日本人兵士の反戦運動を組織・指導したこと、その活動が遠因となって戦後の日本で、アメリカ占領軍による不法な監禁を受け、一時は生命の危険にもさらされながら危うく逃れ、米軍特務機関の実態を暴露する契機となったこと等、それはまさに激動と波乱の生涯でありました。特に、その日本人兵士反戦運動は、延安地区における野坂参三氏の組織した運動と並んで、昭和史に貴重な足跡を残したものと云えましょう。

その鹿地氏が帰国の際米国のフェアバンク博士らの協力で日本に運ばれた資料が、允子夫人の手もとに保存されていることを知りました。その一部は、かつて『日本人民反戦闘争資料』等として公刊されておりますが、他に未整理・未発表のものが大量に残されております。その中には、反戦運動に参加した兵士の手紙など、史料としてのみならず人間の記録として興味あるものがあり、また、当時鹿地氏の周辺にいた中国人文学者の手紙には、中国文学史の資料としての価値も小さからぬものがあります。これらの貴重な資料が埋もれたまま年月を過し、さらにはかなりの傷みが見られることを憂慮し、允子夫人の希望にこたえて、この資料の調査、整理・保存・刊行のために協力したいと考えた有志によって、『鹿地巨資料調査刊

行会』が組織されました。そして鹿地氏個人も含め、何ものをも絶対化・神聖化することなく、何よりも客観的・学問的な態度を維持し、資料自体をして語らしめることを基本方針として、さまざまな方法が検討されました。その過程で、かねて一連の日中戦争関係資料の復刻を続けてきた不二出版から、これらを復刻刊行したいという希望が伝えられ、協議の結果、不二出版に全面的に復刻刊行を委ねることになったのが一九九〇年一月で、ありました。以後不二出版の手で準備がすすめられ、ようやくこの度『日本人民反戦同盟資料』として刊行の運びに至ったものであります。

幸い、原資料も、立命館大学国際平和ミュージアムに委託・保管されることになり、その保存についても、最良と思われる道が開けることになりました。これまで、これら資料の形成・保存・整理に多様な形でご助力を寄せて下さった方々に感謝するとともに、この資料が、多くの心ある人々に利用され、日本および中国の現代史研究の一助となることを願ってやみません。

### 鹿地巨資料調査刊行会

丸山 昇（桜美林大学教授）  
藤原 彰（元一橋大学教授）  
榎橋国武（榎橋出版セミナー代表）  
鶴見淑男（筑波書房代表取締役）  
井上 学（日本図書館協会）  
（故）村松武司（詩人）

日中戦争期にあって、日本の戦争に反対し、生命をかけて反戦のために闘った日本人がいた！ この資料は、その貴重な反戦闘争の記録である。 不二出版

# 反戦同盟の全容と 鹿地亘の足跡が明るみに

——犬丸義一

「日本人民反戦同盟資料集」が復刻・刊行されるという。その一部は今まで『反戦資料』（一九六四年、同成社）として刊行されていたが、それは、その「まえがき」によれば、十分の一に過ぎず、編者・鹿地亘は、選択に「当惑」している。今回その鹿地亘氏所蔵の全資料が見られるようになるのである。日本人人民反戦同盟が日本の反戦闘争の歴史で輝かしい位置を占めていることはいままでもない。私は最近家永三郎他編「日本平和論大系」（日本図書センター）の無産階級の反戦平和思想の編集を手伝ったが、この同盟を収録しなければならぬと思いつきながら、それを収録すればよいか、迷った経験がある。それは、なかなか運動の全容をつかむことができないでいるからである。この同盟が国民党支配地域での活動のため、中共地域のように全面的支援を得たのではなく、妨害され非合法化されたことがあるなど複雑だからでもある。

全機関紙・誌は無論、ピラ、書簡、関連諸組織、中国側資料まで収録され、同盟の全容が姿を現すだろう。この刊行によって、日本の反戦運動・反戦思想の歴史は精密化され、豊富化されるのはいうまでもないであろう。

この同盟が必ずしも歴史に正当な評価を得ていないのは、その指導者鹿地亘の転向の問題もあるかもしれないが、私のような戦後派の人間には、転向にも拘らず、劇的方法で中国大陸に亡命し、魯迅に師事し彼を日本に紹介し、日中戦争に反対し反戦闘争を展開した事実は、運動に再起したのであり、貴重な活動ではないか、と思う。プロレタリア文学運動以来戦後の「鹿地事件」をへて死に至る鹿地亘個人の活動を正当に歴史に位置付けるためにも、この資料集の刊行を喜びたい。一九九〇年の歴史科学協議会の大会報告の「プロレタリア文化運動から民主主義文学運動へ」（『歴史評論』四七七号）で同氏に言及した私としてその時以来の課題を解決する機会を与えられたことを喜んでい

（大東文化大学非常勤講師）

## ●推薦の言葉と関連図書のご案内

### 近代日中関係史の 貴重な資料

——王曉秋

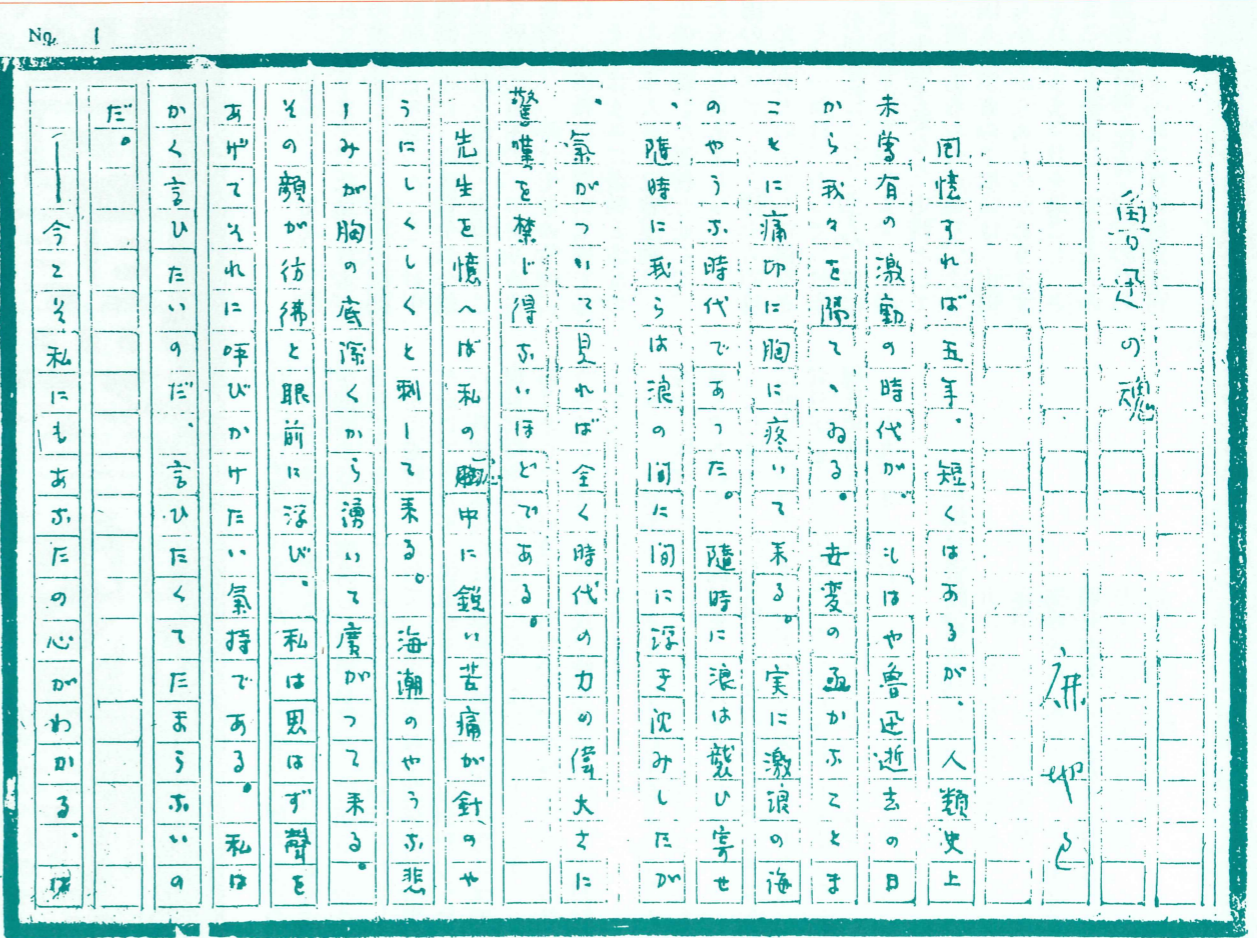
（丸山昇記）

半世紀余りに日本帝国主義が起こした中国侵略の戦争は、中国人民に空前の災禍を与えただけでなく、日本人民にも巨大な苦痛をもたらした。しかし、その血なまぐさい時代にも、日本の何人かの進歩人士が身を挺して、公然とファシズム侵略戦争に反対し、中国人民の抗日救亡の闘争に共鳴、支持し、それは貴重な正義感、勇気と国際主義の精神を示したものであり、また日中両国人民の間の深い友誼を体現したものであった。

鹿地亘と彼が指導した在华日本人民反戦同盟はその中の際立った代表であった。鹿地亘は、東京大学文学部を卒業、青年時代から日本プロレタリア芸術連盟に加入した。一九三五年中国にわたり、間もなく上海で魯迅先生と並々ならぬ友情を結んだ。『大魯迅全集』の編集、翻訳に参加、また日本人民に中国の新しい文学と進歩的作家の作品を積極的に翻訳、紹介した。

日中全面戦争が勃発すると、鹿地亘は自分の運命を中国人民の抗日救国の事業と一つに結びつけた。一九三八年、彼は香港から武漢に行き、招聘に応じて中国国民政府軍事委員会政治部設計委員となり、第三庁庁長郭沫若先生に協力して、日本人民及び日本の将兵に反戦宣伝活動を行った。彼は多くの文章、演説さらに小説、戯曲を発表して、「日本の進歩的文化的良心」「日本人民の代弁者」「中国人民と患難をともにし、ともに奮闘する偉大な友人」と讃えられた。鹿地亘はまた困難や危険を恐れず、捕虜となった日本将兵の反戦組織を準備し、在华日本人民反戦同盟を創立して、重慶、桂林等および前線で活動した。また毛沢東、周恩来等中国共産党の指導者に会ったこともある。在华日本人民反戦同盟は『人民の友』『真理の闘ひ』等の宣伝紙誌を発行し、日本語教育班を作り、対日放送を行い、さらには砲煙弾雨を冒して前線で呼びかけることさえし、メンバーの中にはこのために自らの生命を献げた者もいた。

彼らが日中両国人民の反ファシズム侵略闘争のために果たした貢献を中国人民は永遠に忘れることはない。私は鹿地亘氏の書いた反戦同盟闘争史を読んで深く感動し、蘇



魯迅稿紙（11×18）

林崗先生といつしよにその一部を中国人民に紹介したことがある。残念ながら鹿地亘氏は一九八二年になくなり、直接お目にかかることができなかった。一九八六年訪日した時に、幸い鹿地亘夫人瀬口允子女士を訪問し、所蔵されている鹿地亘と日本人民反戦同盟の大量の貴重な資料と写真をこの眼で見ることができた。私はその時すでにこれは大いに価値のある日中関係史の資料であり、日本人民の反戦闘争及び日中人民の戦闘的友誼を理解する上でも、また日中戦争の歴史の真実を認識し、歴史的経験の教訓を総括、吸収して、今後の日中両国が永久に二度と戦わず、両国人民が子々孫々友好を続けていくことを保証する上でも、重要な意義を持つていと考えた。

従って私はこの資料が世に公開され、学者の研究及び広範な大衆の閲覧に供されることを強く望んでいた。その後東京大学の丸山昇教授等日本の学者が編集委員会を組織し、数年の労苦を経て、ついにこの資料を整理し、不二出版から出版されることを聞いた。私はこの資料集の編集・出版が、近代日中関係史研究を深化させるのに役立つばかりでなく、日中両国の友好関係と文化学術交流にも役立つことを信じている。

（中国北京大學歴史系教授）  
北京中日文化交流史研究会副会長

93、10、2

## 復刻版 反帝新聞

●反帝同盟会編／井上 学 解説  
●B5判・上製・函入・518頁  
●本体価格28,000円

反帝同盟の前身は、一九二七年五月に結成された「対支非干渉全国同盟」である。その翌年七月「反戦同盟」と改称し、さらに一九二九年一月七日に「反帝主義民族独立支持同盟日本支部」（日本反帝同盟）が結成される。日本反帝同盟の生涯は短い。一九二九年末から一九三四年初頭の時期の日本は激動の世界の中で激しく軌む時代であった。日本反帝同盟は、アジア唯一の帝国主義国内で、帝国主義反対・民族独立支持の旗をたて、「新しい戦争の危機」を警告し、「滿蒙侵略戦争」に反対し、「汎太平洋反帝主義民族代表者会議」を提唱し、さらに「上海反戦会議」支持闘争を取りくんだ。本書は、この半世紀前に現われ、歴史の闇の中に埋れた「日本反帝同盟」の残した資料を所々に探り、出来る限り収集し、編集したものである。『反帝ニュース』、『反帝新聞』、パンフレット類は当時の厳しい状況下ほとんど散逸しており、編者の永年の努力によって今回、復刻されたものである。

日本及びアジアの現代史の研究に従事する研究者のみならず、「脱亜」の日本を変え、アジアを平和に創り変えようとする人々に呈したい。

帝国主義戦争反対・民族独立支援の旗をかかげた  
「日本反帝同盟」の機関紙・パンフレットの復刻！

# 「日本人民反戦同盟資料」

## との関わり

丸山 昇

鹿地巨氏の名を知ったのが、いつ頃かというきつかけでだったかは、もう憶えていないが、もちろん戦後である。一九四八年の十一月に買った『魯迅研究』（坂本徳松他著、八雲書店 一九四八）に鹿地氏の「魯迅と中国革命」がはいっているから、その前後だろうか。

直接お会いする機会ができたのは、文革中だったと思う。私たちの研究会で、上海時代から抗日戦中にかけての体験を話していただいたこともあった。その時は、アメリカの蕭紅研究者ゴールドブラッドも参加した。散会后彼が蕭紅についていろいろ詳しい質問をするのに感心した。

そんなことからか、氏の病気が重くなり、清瀬の病院に入院されていた頃、来てくれという連絡をいただいて、何回かうかがった。特別の相談があったわけではなかったが、氏の手元にある「反戦同盟」関係の資料が散逸することを心配され、何とかしたいと思っておられることはよくわかった。

氏の死後、資料の処理に腐心しておられた夫人の相談にのるようになり、とにかく資料のマイクロ化と、多少の整理に手をつけたのが数年前である。一応の整理をしただけで、本格的な研究にはほど遠いが、広く研究者の利用に供せような形にしたい、ということだけを考えていた。

幸いその過程で、不二出版から復刻の話が起こり、まずは順調に話がまとまり、不二出版の仕事も進んで、こういう形で公刊される運びとなった。原資料が立命館大学の平和ミュージアムに委ねられることになったことと合わせて、私としては、何よりもほっとした思いである。この貴重な資料が、広く生かされれば、日本人の精神史にも、日中関係史にも、重要な一ページがつけ加えられるだろうと信じている。

（桜美林大学教授・中国現代文学）

# 「日本人民反戦同盟資料」

## 刊行によせて

大江志乃夫

日中戦争開始後まもなく上海から香港をへて武漢・重慶の国民政府側に脱出し、日本軍捕虜たちによる反戦運動を組織したのが鹿地巨であった。鹿地が組織した日本人民反戦同盟の活動は鹿地巨著『日本兵士の反戦運動』や鹿地巨編『反戦資料』のかたちで一応まとめられているが、その全体にわたる詳細な資料は公表されていなかった。四〇年五月には野坂参三がモスクワから延安にきて日本兵士反戦同盟延安支部を結成して活動を開始したが、中国側で国共の対立がはげしくなると、重慶の国民政府は四一年八月に反戦同盟を解散させた。この年の五月におこなわれた日本陸軍の参謀長会同で、陸軍省兵務局長が「重慶側の謀略宣伝に就き昨年中事変地に於て知得せるもの約二千六百余人に達せり……其の手段益々悪辣を加へつつあり」と口演していることを考えると、残念なことであった。

その後は延安の野坂を中心とする反戦運動が主流となり、鹿地ら重慶での運動は本資料集にいう「同盟の非合法化時代」に入ったが、活動を停止したわけではない。今回不二出版から復刻される書簡類をも含む膨大な資料は、鹿地が帰国にあたり日本にもち帰った資料で、鹿地が上海を脱出してから敗戦後の日本に帰国するまでの反戦運動に関する多面的な資料をかたちづけている。とくに、捕虜となった兵士たちの手紙は、天皇への忠節心だけをたたきこまれて戦場に送られた兵士たちがどのような精神的苦悩と人間的覚醒をへて反戦平和の活動家に成長していったか、その個人的な内面をうかがい知ることができる資料として貴重なものではないかと期待している。

戦後五〇年近くたってようやく日本政府が「侵略戦争」と公式に認めた日中戦場で、いち早く日本の侵略戦争に抵抗し、反戦平和の活動に従事した日本人兵士の良心の証しをこの膨大な資料集から読みとることができることを感謝したい。

（茨城大学名誉教授）

### 本訓 其の一

#### 第一 皇國

大日本は皇國なり。その謂ひは萬世一系の天皇を煙幕とし、實權を財閥と地主の番頭なる軍部官僚の徒が掌握し、以て國民に無窮に君臨するところなり。臣民亦よく忠孝にして皇恩に光被せられ、父祖相受て貧に甘んじ、眼を閉ざして肉弾となり、皇國の成り立ちを賛し奉り、軍部と財閥との隆昌を致せり。  
戦陣の將兵、宜しくこの國体の真相を體得し牢固不拔の信念を堅持し此の美風を守り、誓つて皇國擁護の大任を完遂せざるべからず。

三

### ● 「日本人民反戦同盟資料」主要目次

A 機関紙・誌編	
1 『人民の友』 1-29 (39・12・10↓41・6・1)	② ①
2 『真理の闘ひ』 1-18 (40・4・5↓41・7・1)	
3 『呼声』 1-4 (42・1・20↓5・1) / 『新日本』創刊号	
4 『東亜先鋒』和平先鋒 1-8 (43・9・1↓44・11・1)	
B 資料編	
I 日本人民反戦同盟の発足まで '37・末- '39・12	
II 同盟成立から「解散」まで '39・12- '41・8	④ ③
1 西南支部 2 重慶總部	
III 同盟の非合法化時代 '41・8- '45・10	⑦ ⑤
1 鹿地研究室・米軍との関係 2 平和村訓練班・新生活協会	⑧ ⑥
IV 関連諸組織に関する資料	
1 青山和夫研究室 2 延安、八路军、新四軍 3 朝鮮義勇隊等	
V 毛辺紙の記録と中国側公文 来信	
VI ビラ等	
VII 書簡	
1 同盟員の手紙 2 鹿地・池田書簡	⑩ ⑨

### 對敵播音工作圖解

於第六版(自十一月六日) 至十二月三十日) 在華日本人民反戦革命同盟會總部

第一回總部前線工作

